ヤコブ3章13〜18節「二つの知恵」

ヤコブはこの手紙で主にある兄弟姉妹に向けて語り、目に見えない信仰を見える行いによって表すようにと勧めます。ところが、「私たちはみな、多くの点で過ちを犯す」と言います。では、どのように対処したら良いのでしょうか。

１．知恵がある人（：13）

過ちを犯さないために鍵になるのは知恵であると言います。ただし、その知恵の用い方によります。

13節。神から与えられている知恵をすべての人がふさわしく用いているわけではありません。神が喜ぶように用いられることもあれば、神が悲しみ、怒るような用い方がされることもあります。ヤコブは「知恵にふさわしい柔和な行いを、立派な生き方によって示しなさい」と勧めます。

まず「柔和」であることが求められています。コロサイ書の中に「あなたがたは神に選ばれた者、聖なる者、愛されている者として、深い慈愛の心、親切、謙遜、柔和、寛容を着なさい」(3:12)とあります。柔和は、神の愛をいただいた者が神の愛に倣って積極的に表す態度です。神に罪を赦していただいた者として人の過ちを赦すことと関係します。

また、Ⅱテモテの中に「反対する人たちを柔和に教え導きなさい。神は、彼らに悔い改めの心を与えて、真理を悟らせてくださるかもしれません」(2:25)とあります。柔和さは、人と争い、従わせるのとは反対で、神が悟らせ、導いてくださることを信頼して人に接することです。自分をアピールしたり、自分の主張を押し通したり、相手を言い負かすことから解放された態度です。

そのような柔和さの内にことばや行いを示すようにと言います。それを「立派な生き方によって」示すようにと言います。「生き方」ということですから、生活の全体を通してということでしょう。

そのような生き方をする人は、きっと過ちを犯すことが少ないでしょう。舌を制して、ふさわしいことばを語ることができるでしょう。私たちも神の愛を表し、神のみわざを信頼して、生活を通して、柔和なことばと行いを表すことができるように祈りたいと教えられます。

２．上から来た知恵ではない（：14〜16）

一方で、知恵の間違った用い方をする人がいます。14節。

旧約聖書の中に「ねたみの神」ということばがあります。同じ「ねたみ」ということばですが、大きく違います。たとえばモーセの十戒において神、主は、「わたし以外に、ほかの神があってはならない」、「自分のために偶像を造ってはならない。…それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない」と命じます。そして、「あなたの神、主であるわたしは、ねたみの神」と言われます。その場合の神の「ねたみ」とは、本来、神、主だけが持っておられる栄光と主だけに献げられるべき礼拝や献身を求めておられるのです。主がご自身のものを当然のこととして求めておられるのです。

けれども、ここで言われている人の「ねたみ」はそうではありません。自分のものではないものを欲しがることなので、「苦々しいねたみ」と言われています。その自分の欲望を満たそうとして、知恵を使うことがあります。「自慢したり、真理に逆らって偽ったりする」ことがあります。

また、「利己的な思い」があるときにも知恵を間違って用いてしまいます。「利己的な思い」と訳されている元のことばは他のいくつかの聖書箇所では「党派心」と訳されています。心の中に「利己的な思い」や「党派心」があるなら、自分の権力とか名声を得るために集団を分裂させようとし、自分のもとに人々を集めようとします。そのために知恵を使って「自慢したり、真理に逆らって偽ったりする」ことがあります。

そのような知恵の用い方は決して神に喜ばれるものではありません。15節。「上から来たもの」ではありません。むしろ、「地上のもの」「肉的」「悪魔的」と3つのことばを重ねて表現しています。人の罪によって知恵が間違って用いられ、しかも悪いものからより悪いものへと進んでいくと言われています。

そのような知恵の用い方は人の罪の現れであり結果です。それでも、罪人自身にはそのことが分かっていないだろうと思います。むしろ自分には知恵があり、知恵をうまく使っていると思っているでしょう。そして、

「地上のもの」「肉的」「悪魔的」とより悪いほうへとエスカレートしていることにも気づかないかもしれません。しかし、実際には結果として現れています。周囲に悪影響を与えています。

16 節。罪に支配されている知恵の用い方の結果として、「秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行いがある」のです。キリスト者でもそのような知恵の用い方をして、教会に悪影響を与えていることがあったのでしょう。それでヤコブはこのように注意を与えているのです。

もし私たちのことばや行いが教会の中に混乱や悪を引き起こし、それが続いているとしたら、それは「ねたみや利己的な思い」が心にあって、神に喜ばれないような知恵の用い方をしているということなのです。

３．上からの知恵（：17〜18）

そのように教会の中に混乱があるときにどうしたら良いでしょうか。答えは「上からの知恵」を求めることです。17 節。「上からの知恵」によって生み出される特質があると言います。ここに八つの人格的な特質が挙げられています。

第一は清さです。Ｉヨハネの中に「キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします」(3:3) とあります。キリストの清さを反映させる態度です。このことが「まず第一に」挙げられているので、主要な特質であると言えるでしょう。

続いて、平和、優しさ、協調性、あわれみ、良い実に満ち、偏見がなく、偽善がない、と挙げられていて、清さと合わせると八つになります。これは、主イエス様が山上の説教の初めに幸いな人について八つの面からお語りになったことに似ています。「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです」から始まって、八つのことが語られました。その中には、「柔和な者は幸いです」「あわれみ深い者は幸いです」「心のきよい者は幸いです」「平和をつくる者は幸いです」ということばがあり、それらがこの箇所に反映されているように思います。

この八つの項目について、それぞれが自分の状態を顧みて、自分に足りない項目があるなら、その点について祈り、それを意識して生活すると良いのです。そのように日々の生活における私たちの指針となる八つの項目が教えられているのです。

上からの知恵を求め、八つの特質を心に留めつつ、日々生活していくと、どのようなことになるでしょうか。

18 節。「義」に関しては、1 章 20 節で「人の怒りは神の義を実現しないのです」と教えられていました。私たちは、自分が神に代わる裁判官であるかのようにして他の人を裁いても、それで神の義を実現できるわけではありません。むしろ、怒りを持ち続け、罪を犯しやすくなります。そうではなくて、柔和で清いことばや行いによって平和をつくる者として生活していくときに、「義の実を結ばせる種」を蒔いていくのです。

種を蒔いても、すぐに実を結ぶわけではありません。しかし、種を蒔いていくなら、やがて実を結ぶことになるでしょう。上からの知恵によって、柔和な行いを続け、キリストに倣って清い態度で歩むなら、そして平和をつくっているなら、蒔かれた種から神が芽を出させ、成長させ、実を結ばせてくださいます。

私たちは自分がそのようにできる自信はありません。しかし、上からの知恵を求めて祈り、へりくだって、自分の態度を顧みつつ、生活していくなら、神がみわざを行ってくださいます。

今日の箇所でヤコブがいうように、知恵の用い方には二種類あります。

一つは自分のものではないものを欲しがり、自分の権力や名声を得ようとして知恵を用いることです。そのような用い方は地上的、肉的、悪魔的です。その結果、混乱や悪を引き起こします。

もう一つは上からの知恵を求め、神に喜ばれるように用いることです。神の愛を表し、神のみわざを信頼して、生活を通して、柔和なことばと行いを表すことです。また、キリストに倣って清い態度で歩み、平和をつくることです。

私たちは上からの知恵を求め、正しく用いましょう。上からの知恵の特質として挙げられている項目に対して自分がどのような状態であるかを顧みましょう。清さ、平和、優しさ、協調性、あわれみ、良い実に満ち、偏見がなく、偽善がない、これらの項目を意識して生活しましょう。